



けいれんのお話



当院は、中勢地区の小児二次救急医療を365日、24時間対応で行っています。救急車で受診される患者さんの中でも、けいれんは最も多い症状の一つです。今回は、けいれんについての基本的知識や、初期対応などについて説明いたしましょう。

子どもの約10%はけいれん(ひきつけ)の経験があるといわれていますが、その原因は様々です。



1. けいれんの原因

熱性けいれんが一番多くみられますが、その他てんかん、脳炎、髄膜炎、脳の先天奇形、脳腫瘍、頭部外傷などでけいれんをおこします。熱性けいれんによく見間違えるのは「寒気」(悪寒戦慄-おかんせんりつ-)です。高熱が急激にでるとき、顔色が悪く、手足が冷たくて、ガタガタと小刻みに震えている状態です。寒気の場合は、意識がしっかりしていますので、あわてずによく暖めてあげて下さい。

2. 熱性けいれんについて

熱性けいれんは、乳幼児が38℃以上の熱をだしたときに、一緒におきるけいれんで、脳炎などの明らかな原因疾患がないものを言います。生後半年くらいからおきやすく、5~6歳まで見られます。生まれて間もない乳児や、小学生でけいれんを起こした場合は、他の病気が強く疑われます。

医療福祉相談室
だより

南3病棟(神経内科)療養介護サービス導入のご案内

当院は、三重県から難病拠点病院の指定を受け、良質な医療の提供を心がけるとともに安心して療養に専念いただけるよう努力いたしております。

現在、平成27年初夏頃を目標に、南3病棟入院中の患者様がよりよい療養環境となるよう、療養介護サービス提供の準備をしております。

療養介護サービスを受けることができる患者様は、南3病棟入院中の気管切開を伴う呼吸管理が必要なALS等の患者様です。該当される患者様は、現在当院

3. けいれんを起こしたら

ほとんどの熱性けいれんは、数分でおさまります。まず、落ち着いて下さい。そして、そっと寝かせてあげ、吐いても詰まらないように、顔を横に向けて下さい。余裕があれば、何十秒くらい、どんなけいれんをおこしているのか、見てあげて下さい。逆に、してはいけない事として、口の中に何かを突っ込むこと、揺り動かしたり、大きな声で刺激することなど、があります。

4. 救急受診はどうする?

普通の熱性けいれんなら、急ぐことはありませんが、何か原因があって高熱がでているわけですから、診察を受けてください。10分待ってもけいれんが止まらない場合、10分以内に止まっても、強い頭痛や嘔吐を伴う、意識障害がある、など非常に具合が悪いようなら救急車を呼ぶなどして、病院受診して下さい。

5. 要注意のけいれん

以下の場合、早めの病院受診が必要です。

- 発作が10分以上続いたり、短い間隔で繰り返し発作が起こるとき。
- からだの一部分の発作の場合。
- 初めての発作が、1歳未満の場合。
- 意識障害、麻痺など他の神経症状を伴うとき

(小児科 菅 秀)



が提供している医療上必要な看護体制に加え、療養介護職員より療養上必要な介助を手厚く受けることができるようになります。

今後も入院患者様のよりよい療養環境になるよう努力をしていきたいと考えておりますので、みなさまのご理解とご協力をよろしくお願い致します。

(ソーシャルワーカー 三好 亮司)